

マルコ福音書3章13～19節

「キリストの使者」（徒の選任、役割）

「使徒」とは主イエスと起居寝食を共にし、直接主イエスより権威を委託された者です。私共は、この実際に主と共にこの地上の生を歩んだ使徒達ではありません。しかしその使徒達の伝承に即し、信仰を与えられた者であり、使徒のもっていた有り様（使徒性）を受け継いでいるのです。使徒とは、前回記したように「代理大使」「派遣された者」という意味ですが、「主イエスの権威」（この世の上からの抑圧的権威とは異なった、「愛の権威、仕える権威」）を委ねられ、この世に遣わされた者という有り様を受け継いでいるのです。私共はバプテスマを受け、キリスト者（キリストのもの）とされたとき、その存在様式に変化が生じます。外見的な変化でなく、信仰による内面的、靈的变化です。一番大きな変化は、今まで自分の人生はただ自分自身のための生でした。勿論誰でも主なる神の創造の秩序の中にあり、他者のために生きる存在であるという必然性を担っております。しかし多くの人達は、そこに主イエス・キリストにおける神からの召し、派遣という靈的側面は視野には入ってこないのです。それゆえ地上の生はただ私が私と生きるということにつきるのです。しかし主イエスにお出会いしてからは、この私が私として生きるその場は、それが家庭であろうと、職場であろうと、学校であろうと、各々の生活の現場、そこはすべて主イエスによって遣わされた場になるのです。私どもは主イエスの「お使い」なのです。全てのキリスト者はそのような「使徒性」を担っているのです。

前回主イエスが「山に登って、みこころにかなった者たち」を使徒として選んだということを取り上げ、「呼び寄せて」選ばれたということについてメッセージをいたしました。改めて、この「呼び寄せて」という言葉について記します。

この「呼び寄せる」という語は新約聖書では主イエスによる「召命」を表す大切な言葉です。「呼び」は原語では「カレオー」という語（英語では「call」）で、「呼ぶ」「召す」「招く」（マルコ1：20）と訳されています。「呼び寄せられる」は「プロス」（「～へ」の意）という前置詞との合成語で「プロス・カレオー」という語が用いられています。教会を表す原語は「エクレシア」ですが、これはエク（「～から」の意）とカレオーの合成語で「～から呼び集められた者」という意味です。キリスト教会は本来は「教える会」ではなく、主イエスによって、この世から主のもとへと呼び寄せられた者の共同体なのです。

アルバート・シュヴァイツァーが40歳になって召命を受け、医療伝道を志した時に、友人たちは反対して彼のオルガンの恩師ヴィドール先生の所に行つて「なぜあなたは彼を止めなかったのですか」と尋ねた時に、「神様が呼んでおら

れるのに、どうして私が止めることができるのでしょうか」と答えたそうです。

召命とは私共の内側から生じる「何事かをなさねばならない」という声であり、ある学者は「内面の促し」と呼んでいます。しかし聖書的表現でいうなら「主イエスが呼び寄せておられる」ということです。使徒達は主イエスに呼ばれて使徒となりました。私共は使徒ではありません。しかし私共も形は違うにしろ、主イエス・キリストに呼ばれて、召されて、キリスト者となり、世に遣わされているのです。

もう一つこの「使徒選任、任命」の記事で、「任命する」と訳されている語（14節、16節、口語訳「お立てになった」原語「ポイエオー」）という語が大切です。「創る、する、備える、かなえる」との意味があります。新約釈義辞典では「神の創造主としての業、歴史を通しての業、未来的、終末論的業を表す。共観福音書では特にイエスの救いの業に関係して用いられている」と説明されています。神が、その御業をこの歴史上でなすにあたっての創造的働きを意味する言葉です。使徒が選ばれたということは、それ自体が神の歴史的創造の御業であり、また使徒達はその自分に与えられた働きをなすことで主なる神の創造的働きに参与するのです。私どもにおいてもまた、この世にあってキリスト者として、「主のお使い」として召されたということは、そのこと自体が主なる神の創造の御業であり、またたとえどんなに私共の業であっても、それが神の創造的働きに参与することなのではないでしょうか。

3章16～19節には、主イエスによって「使徒」に任命された者の名前が記されています。ここに名が挙げられている12人の人物については、各人がどのような人物であったかは詳細にはわかりません。かろうじてペテロについては、父がヨハネという名前であったこと（ヨハネ12：15）、漁師であったこと（マルコ1：16）妻帯者であり、カフェルナウムに住居があったこと（マルコ1：29、30）、初代教会の指導者であったこと（使徒言行録2：14～）等がよく知られています。しかし、その古代教会の中心的人物であったペテロに関してすらもどんな幼少時代をすごし、どんな教育をうけ、どんな家族であり、何歳まで生きたかといった伝記的なことは何も記されていません。まして他の使徒達について現代の私たちは知る術がないのです。バルトロマイ、タダイという人物にいたっては、この使徒の名前が列挙されている今日の箇所以外は聖書の他のどこにも名前がしるされていません。福音書著者はどうやら12人の使徒達の人格、人柄、家柄には興味をもっていなかったようです。要するに決して彼らの伝記や生涯を記そうとしたのではなく、ただ主イエスは12人の者達を使徒として選任、任命したという事実だけを記そうとしたのです。彼らは名もない存在でした。

その名もない、単なる普通の何ら変哲もない人物を主イエスはご自分の「使徒」として選ばれたのです。「兄弟たちよ、あなた方が召された時のことを考えてみるがよい、人間的には知恵のある者は多くはなく、身分の高い者は多くはなく、神は無きに等しい者をあえて選ばれたのである」（Ⅱコリント1：26）という聖言がありますが、彼らはただ主イエスが召し、選んでくださったということだけによって「使徒」となっていたのです。

この使徒のリストの中で、一番気になるのは「イスカリオテのユダ」です。マルコ福音書では「それに、イスカリオテのユダ」と別扱いに記し、さらに「このユダがイエスを裏切ったのである」と断り書きを付加しています。わざわざ読者に目立つように印象づけているように思えます。

このマルコ福音書が記された頃、あるいは伝えられた頃は、まだ使徒達が活躍して間もない頃でした。ペテロ、ピリポ、バルトロマイ・・・といった名前を聞くと「ああ、この人達が私たちのこの教会を造ったのだ・・・」「私はこの先生によって主イエスのことを伝えられたのだ・・・」と懐かしく思い、親しみをもってこの12人の使徒の名前を読み、聞いたはずです。しかしその中に「イスカリオテのユダ」が記されているとなると、他の使徒達の名前とは違って、訝し気に、また苦々しい思いで「こんな人物は12人の中から抹殺してまった方が良いのに・・・」と考えたことと思います。もし私どもが自分の属している教会員の中に何らかの教会の恥になるような悪事を働いた者がいるとなると、そのような者の名前は教会員名簿から除去してしまいたいという思いになるのではないのでしょうか。しかし福音書著者は決して「イスカリオテのユダ」を使徒名簿から抹殺していないのです。何故でしょうか。

考えられることは、この福音書著者は「イスカリオテのユダ」と「自分自身」とを切り離して考えていないということです。主イエスを裏切ったユダは自分自身でもあるのです。

ユダのように主イエスを裏切る者さえも選ばれていった事柄とこの自分が選ばれていったこととは別のことではないのです。ユダさえも選ばれていったからこそ、このような自分も選ばれることが可能だったと考えたのです。それ故ユダを使徒名簿から消し去るどころか、喜んで名簿に加えていったのです。

カール・バルトという神学者が、「教会教義学」という大著の中で、この「イスカリオテのユダ」について解き明かしています（邦訳「イスカリオテのユダ」―神の恵みの選び―新教出版社）。最期に結論的に以下のように記しています。「神は棄てられた者が信ずること、また信仰者として『選ばれている棄てられた者』となることを望んでおられます。棄てられた者は神の前に棄てられた者とし

て独立した存在を持っているのではない。彼はただ棄てられた者でしかないように神に定められているのではない。むしろ彼は、自分が『選ばれている棄てられた者』であることを聞き、また自分でも語るように定められている」

ユダは決して「神から棄てられた者でしかないような独立した存在」ではないのです。彼は確かに「棄てられてしまった」ような様相をもっています。しかしそれでも尚、選ばれた者であり、選ばれた棄てられた者なのです。福音書の中に記されていることで、ユダ自身がそのことを証しているといえます。ユダもまた選ばれた者であるからこそ、私たちがまた選ばれた存在といえるのではないのでしょうか。いったいユダと私どもにどれほどの違いがあるのでしょうか。ユダもまた主イエスによって選ばれた存在であるからこそ、私たちがまた選ばれた存在であり得るのです。

選ばれた12人は種々様々な人物です。性質も性格も異なり、育った環境も、政治的思想も違います。しかし主イエスによって「み心にかなった者、呼び寄せられた者、立てられた者」（口語訳）であることにおいては同じです。また彼らは共同の目的、役割のもとに召されました。14節には、その主イエスによって召され、選ばれた共同の目的、使徒達の役割、なすべき御業について、三つのことが総括的に記されています。

「自分のそばに置くため」「宣教のため」「悪霊を追い出す権威をもたせるため」です。「自分のそばに置くため」が最初に記されています。使徒はすべてのことに先立って主イエスのもとにおることが求められています。「そばに置く」は単に主イエスと起居寝食を共にするという物理的、距離的近さを意味するのではなく、主イエスと本質的な関わりの中にあるということです。使徒としての歩みにおいては、全てのことに先立って主と共にいること、主のそばにおることが求められるのです。「イエスは信ずる対象であるよりは『共にいる存在』なのである」（田川著「マルコ福音書」p217）。

ブドウの木の幹につながっていなければ、実をならせることはできません。主なるキリストのそばに居り、主なるキリストにつながっていることによってこそ二番目の「宣教の業」へと向かうことができるのです。

「宣教」（原語ケリュースー）とは、王が国民に重大な宣告をするときに用いる言葉です。使徒達は主イエス・キリストという王の中の王によって、重大な、無くてならぬ使信をもって人々に遣わされていく存在なのです。私共もまたそのような使信（キリストの福音）を担って、世へと遣わされる者としての主イエス・キリストによって選ばれた者であることには変わりありません。